

topics

01

ビジネス

病院再生ビジネスの可能性

高齢化による医療費の増大やそれに伴う診療報酬の改定、医師不足などを背景に、国内の病院が相次いで倒産している。厚生労働省の「医療施設調査」によると、1990年に10096もあった病院が2007年5月末には883までに減少、今もその数は下降の一途をたどっている。このような多くの不安材料を抱える医療業界に、一石を投じるのが「病院再生ビジネス」の存在だ。

「病院再生ビジネス」は、金融機関等の保有する病院の債権や不動産の価値を向上させ、病院経営を健全な状態にすることを目的としている。スキーム自体は目新しいものではなく、企業再生ファンドや不動産ファンドと同様の手法だ。まず、投資会社や証券会社などが投資対象となる病院の価値を算定（デューデリジエンス）した上で、病院の土地や建物といった不動産、金融機関等が保有する病院への債権を証券化し、投資家から出資金を募る。その後、経営再生のための専門スタッフを派遣し、病院の財務状況や事業体制の改善・効率化を図ることでバリュウアップを行う。もともと経営不振で価値が下がっているため、経営再建がうまくいけば得られる利益も大きく、病院側と投資側の両方にメリットがある。

ところが、実際は、必ずしもこの病院再生ビジネスはうまく機能していない。投資会社や証券会社などが、利益に目をつけて新規参入する一方、病院経営は企業経営とは異なって資本の論理に馴染まない面も多いからだ。例えば、一般の事業会社であれば不採算部門を潰すことは経営効率化の点で合理的であるが、病院の場合は採算がとれない診療科を潰すと、その地域で特

定の診療料がなくなってしまうことにもつながる。結果、地域の住民が適切な医療を受けられなくなる事態が生じうる。

このように、経営の効率化を最優先に考える投資側と地域の人々に適切な医療を提供したい病院側では、目指す利益が相反するケースが多いといえるだろう。負債を長期間保有することはリスクを伴うことに加え、病院は事業会社とは違って利益配当やIPOによる資金回収ができないため、投資会社からは売却によるエグジットを目的とする傾向にある。一方で、利益追求型の病院再生ビジネスは病院関係者や地域住民の反発を招きやすく、強硬な経営改革は病院の運営そのものに支障をきたしかねない。短期での転売を狙った金儲け主義のファンドの存在によって、ビジネスそのものに対する批判の声も大きいのが現状だ。

しかし、一概に病院再生ビジネスのデメリットばかりに焦点を当て、良いか悪いかを論じるには少々性急すぎるのではないだろうか。これまで、金融機関は病院の社会性を鑑みて、一般企業より低いハードルで病院に融資を行ってきた。結果的に、多くの病院が経営に対して放漫であったという事実は否めない。今の医療環境を改善し、地域住民に適切な医療サービスを提供し続けるためには、病院側も自ら変革していかなくてはならないだろう。

「適切な地域医療を永续するために、安定した病院経営の下に利益を上げること——」。利益の追求ありきではなく、再生ビジネスを行う側と病院側が地域社会の貢献に向けて目線を同じくすることができるのであれば、病院再生ビジネスは医療業界の改善に向けた試金石となるのかもしれない。

Science

topics

02

サイエンス

型破りなチャレンジ精神がつかんだノーベル賞

「難しいからやらない」という発想が一番きらい。

これは、緑色傾向タンパク質（GFP）の発見とその生命科学への貢献というテーマで2008年のノーベル化学賞を受賞した下村脩博士の言葉である。その一方で、自らを「アマチュア・サイエンティスト」と名乗る。そこには、ノーベル賞を受賞した学者のイメージから遠い、肩から力の抜けたリラックスしたイメージも伝わってくる。

ノーベル賞は科学分野における世界最高の賞であり、簡単に受賞できるものではない。では、自称アマチュア・サイエンティストの下村博士はどのようにして、この世界最高の栄光を獲得できたのだろうか。

研究のきっかけは、少年期の下村博士が郷里の港町で毎年のように見ていたオワンクラゲがなぜ光るのか、その理由を知りたいという純粹な動機だったという。医学への応用など夢にも思っていなかった、いわば少年時代の夢を追いかけてつづけた結果でしかないのだ。そして、そのテーマが難しいものでも、下村氏はあきらめずにコツコツと取り組む。その結果は、研究開始から17年がたつて評価された。

簡単に結果が予測できて実践可能なことをどれだけくり返しても、誰も評価してはくれない。しかし、少年時代の夢や疑問に自分自身が応えるために難しいテーマにひるまず取り組むひたむきな姿勢は、確実にノーベル賞へと近づいていたのだ。

Technology

テクノロジー

ロボットは人間になる夢を見るか

topics

03

昔、ロボットといったらブリキの玩具のことだった。

1996年に自動車メーカーのホンダが二足歩行人型ロボットP2（初代ASIMO）を発表したときの衝撃は大きかった。普段、われわれは何気なく手脚を動かして生活しているが、そのメカニズムは機械で簡単に再現できるものではない。人型ロボットとは、あらゆる技術の集合体なのだ。それからさまざまな研究者や企業がロボット

研究事業に参入し、動物型の自律式ペットロボットが発売されたり、女性特有の柔らかな動きを再現したロボットが発表されたりもした。ロボットは今後、どのような進化の道を歩むのだろうか。

ひとつの到達点は、やはり手塚治虫が描いた鉄腕アトムだろう。自分で考え、喜怒哀楽を表現し、100万馬力で空を飛ぶ。人間の友達であり、家族だ。

それを実現するための課題はまだ多い。人間の生活のなかに溶け込むためには人型により特化したスムーズな動きが求められるし、なにより人間に匹敵する人工頭脳をハードとソフトの両面で実現しなければならぬ。次第に構成部品が金属から有機的な材質に置き換わっていけば、人間とロボットの境界がより曖昧になっていく。

アトムは子供の姿のまま成長しないという理由で生みの親からサーカスに売られてしまったが、いつの日か、人間と同じように成長して老い、喜びや悲しみを分かちあいながら死を迎えるロボットも登場するのだろうか。